



◆表紙さまざま 張州雜志（解説八ページ）

蓬 左

HÔSA

名古屋市蓬左文庫

NO. 53

HÔSA LIBRARY, CITY OF NAGOYA

展示室

張州雜志展

I 尾張の祭礼

十月七日～十二月三日

II 熱田と津島

一月十三日～二月十一日

III 知多郡・春日井郡の風土と生物

二月二十四日～三月二十四日

『張州雜志』は、尾張藩士で、画家としても知られた内藤東甫（一七二七～一七八）が著した百冊におよぶ大著です。その内容を一言でいえば、尾張の地誌ということになりますが、挿入された自筆の挿絵の豊富さ、多様さをはじめ、一言では表現しきれない内容をもっています。

また、『張州雜志』は、著者内藤東甫の急死により未完のまま残されたものであり、現在の百巻百冊に装訂されたのは、東甫の死後のことです。東甫が亡くなった際、『張州雜志』は未定稿の状態で、現在百冊に整理された中には、書き消しや朱書の文章の挿入がある箇所が含まれています。

『張州雜志』百巻の構成は巻一～一九（知多郡）二〇～二三（東照宮祭礼）二四～五八（熱田）五九～七九（津島）八〇～八一（甚目寺）八二～八六（妙興寺）八七（明眼院）八八～一〇〇（春日井郡）で、尾張国の全域を網羅するものとはなっていません。

東甫没後、百冊にまとめられた『張州雜志』は、藩の文庫に納められました。藩では、尾張国内の地勢をしるした書物であることから、原則として藩主以外は閲覧できない書物のひとつとされ、このため、江戸時代にはほとんど一般の目にふれることはありませんでした。

内藤東甫、本名浅右衛門正参は、享保十二年（一七二七）五百石取りの尾張藩士の家に生まれました。御側小姓、御小納戸役、地廻りなどの藩士としての役職を勤めるかたわら、天明八年（一七八八）に没するまで、画家としての仕事をはじめ、『張州雜志』を代表とする著作もふくめ多くの作品を残しています。

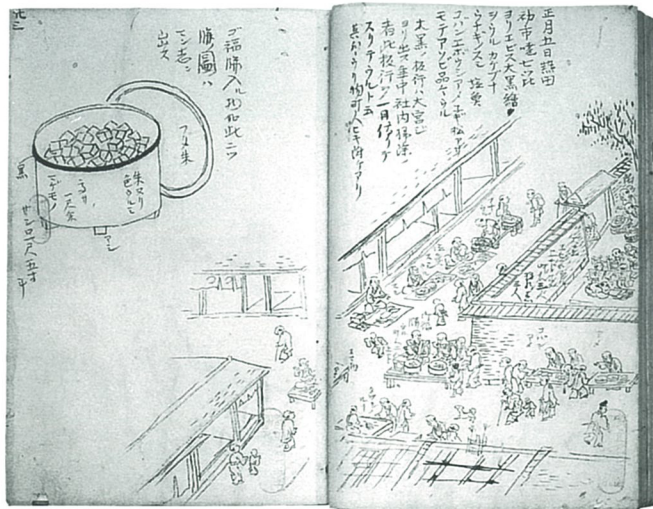
東甫が『張州雜志』の執筆に精力的に取り組むのは、安永年間（一七七二～）以降と考えられますが、資料収集などの活動は、すでに宝暦年間（一七五一～）には始まっていたものと推定されています。一方、尾張藩は、宝暦二年、最初の藩撰地誌『張州府志』を完成させますが、記述が漢文であったことから、寛政六年（一七九四）頃、九代藩主宗睦は、その和文改訂と補訂を命じました。なお、この改訂事業が本格化して、『尾張志』として完成するのは、弘化三年（一八四六）のことです。東甫の『張州雜志』の編纂が、『張州府志』とまったく無関係に始められたとは考えられず、一方、藩に献納された『張州雜志』は、宗睦の『張州府志』補訂事業開始に何らかの影響を与えたであろうと思われます。

藩撰地誌が八郡と名古屋・熱田・津島・清洲の別に領域・沿革・荘名・郷名・村里・形勝・文事・官舎等各内容を整理し記述したのに対し、『張州雜志』は村ごと地域ごとそれぞれに記述し、各村周辺の景観や地図、産業や祭の様子、生息する動植物などについての挿絵を挿入しています。また寺社についても周辺の景観や地図はもちろん寺社を描いた古い絵画も挿入、とくに、宝物については、精密な模写を収録し、所蔵する古文献についても、影写をまじえて収録するなど現在の文化財調査にも匹敵する内容を持っています。ちなみに、現在重要文化財に指定されている熱田神宮所蔵の日本書紀については裏文書を含めすべて収録されています。

この度の展示では、「尾張の祭礼」「熱田と津島」

「知多郡、春日井郡の風土と生物」と三つのテーマに分けて『張州雜志』を紹介します。

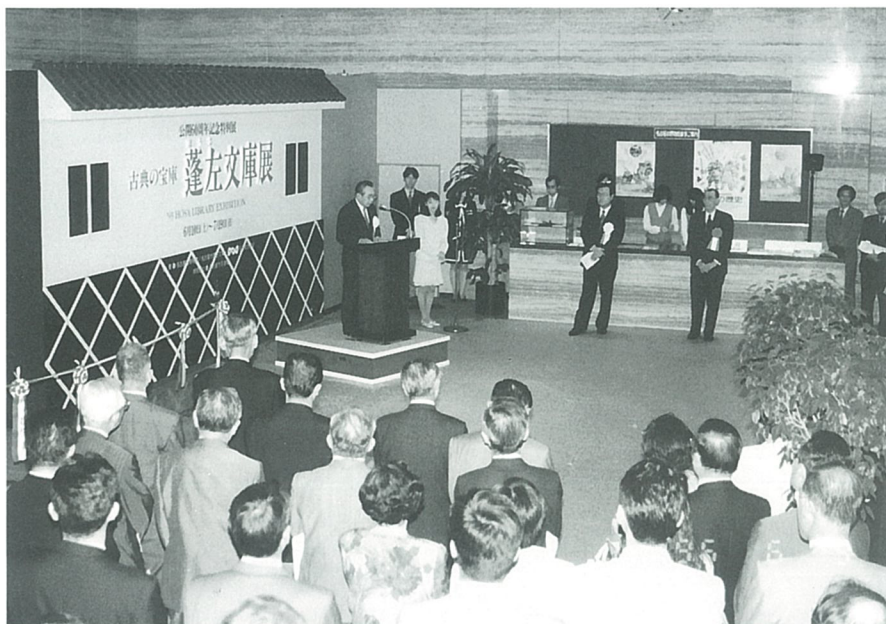
とくに「尾張の祭礼」では、所蔵者の御厚意により六・七頁に紹介した新しく確認された『張州雜志』の草稿本を展示いたします。また、通常一冊一場面しか展示できない「東照宮祭礼図」については、カラーパネルを使用し、できるだけ多くの場面を御覧いただけます。



太平墨 9冊（名古屋市鶴舞中央図書館蔵）

内藤東甫自筆稿本（23.0×16.2cm）

内藤東甫の雑纂。この「熱田初市の図」の部分から描いたと推定される図が『張州雜志』巻50に収録されている。



「古典の宝庫・蓬左文庫展」開会式（平成7年6月9日）



出口付近に設けられた「蓬左文庫手習い塾」教科書に出てくる日本や中国の古典のパネルを交えた展示コーナーや和装本に実際に触れてみるコーナーなどが設けられました。また、火・水・木の午後2時～4時には、尾張藩主の系譜調べ方コーナーも開設されました。



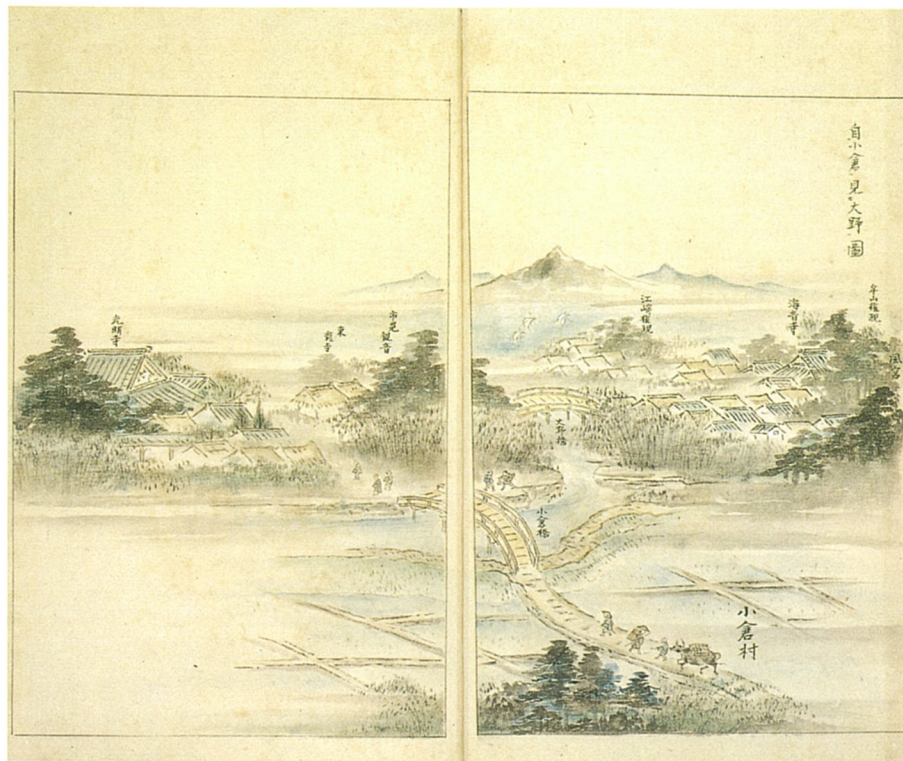
「蓬左文庫展」のキャラクター「しきぶちゃん」小中学生向けのクイズなどに活躍しました。

六月十日（土）から七月九日（日）まで、名古屋市の博物館において、「古典の宝庫・蓬左文庫展」が開催されました。この展覧会は、平成七年が、昭和十年の蓬左文庫公開から六〇周年にあたるのを記念して、蓬左文庫の蔵書と歴史とを広く一般の方々に紹介しようとしたものです。

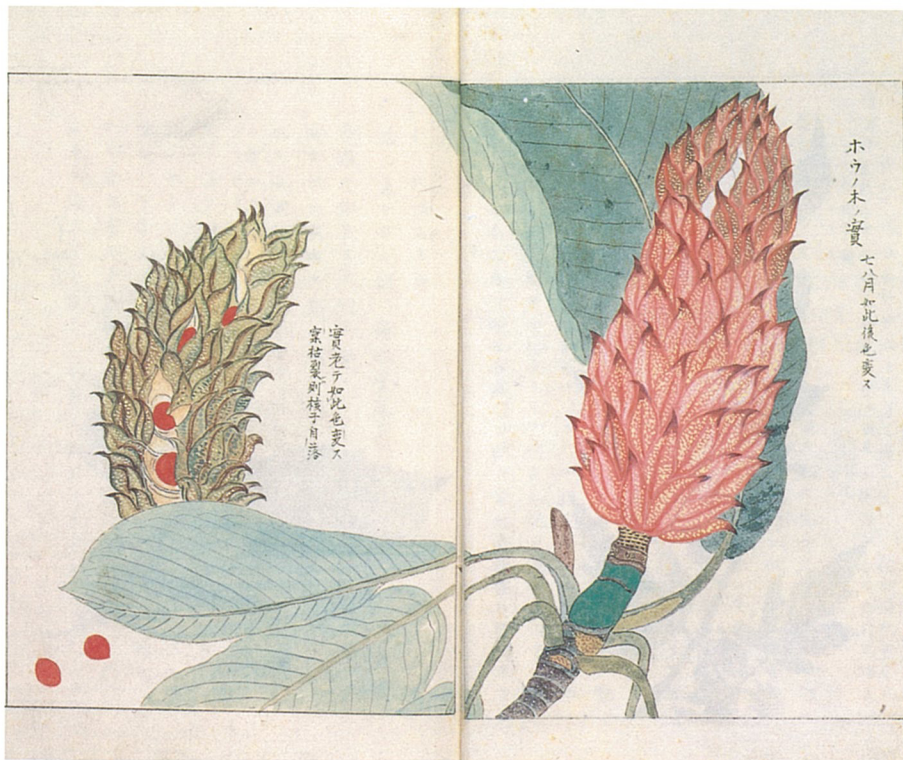
「一 駿河御譲本と義直・光友の蔵書」「御文庫」の創設」「二 調度としての書物」「夫人たちの蔵書を中心に」「三 名古屋学の旗手たち」「江戸後期の「御文庫」」「四 書物を守り、伝える「蔵書目録と蔵書印」」「五 尾張藩「御記録所」―藩史編纂と史料収集―」「六 大名の世界観―絵図コレクション―」「七 蓬左文庫設立」の七つのテーマを設定し、博物館一階の部門展示室・特別展示室の二室にわけて七件の重要文化財をはじめ一二〇件約一五〇〇点の蔵書が展示されました。とくに今回はかつて蓬左文庫が所属した徳川黎明会から初代藩主義直所用の文房具飾りや「御記録所」の編纂書なども出陳されました。

蓬左文庫の主要な蔵書が一堂に会するのは、名古屋に移管三〇周年を記念して昭和五五年に開催された「蓬左文庫名品展」以来のことです。

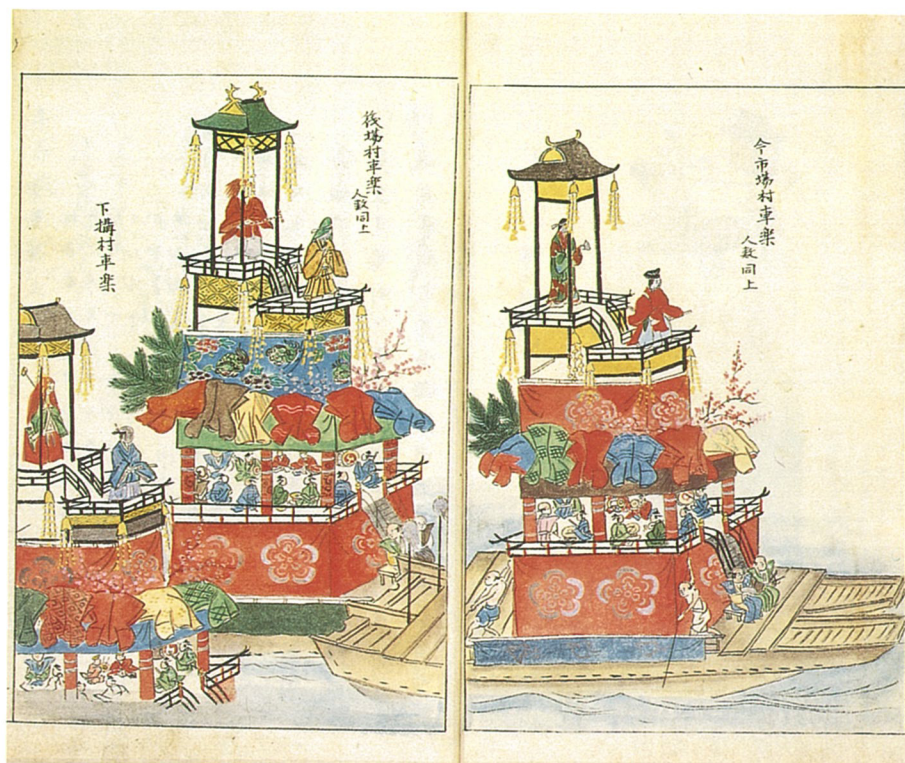
今回は、蒔絵容器をとまなう豪華な装飾本や江戸時代の世界図・日本図をはじめとする大型絵図など古い書物が持つイメージとは異なる展示品も交え比較的親しみやすい展示となりました。さらに「蓬左文庫展」のキャラクター「しきぶちゃん」が案内する小中学生向けの説明パネルやクイズ、教科書に掲載されている古典の紹介、実際に和装本に触れてみるコーナーや尾張藩士の系図調査の方法について案内するコーナーなど子どもから大人まで様々な興味・視点で見えていただけるよういくつかの試みを企画しました。観覧者からは、「蓬左文庫にこれほど様々なものがあるとは思わなかった。」「思っていたよりもずっとわかりやすく、親しめた。」などの声も聞かれ、一七、〇〇〇人を越える観覧者数を記録して、好評のうちに幕を閉じることができました。



『張州雜志』卷6 知多郡小原村より同大野村を見る



『張州雜志』卷98 春日井郡の植物「ホウノ木」



『張州雜志』卷72 津島神社朝祭



『張州雜志』稿本（解説六・七頁）

(25.8~27.0×17.8~18.3cm)

上3冊 豊田氏蔵（名古屋市博物館受託）

下1冊 柴田氏蔵（ ）

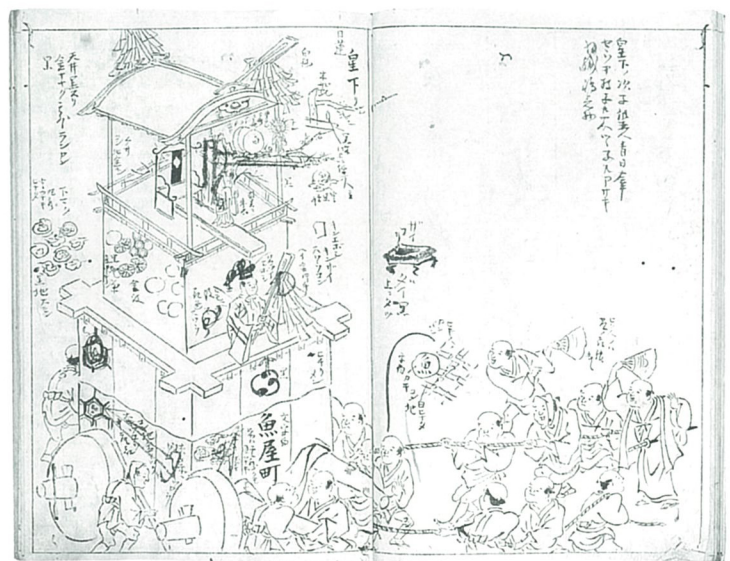
『張州雜志』稿本の出現

山本 祐子

『張州雜志』は謎の多い本である。よく知られた尾張史料であり、その価値は多くの人が認めている。研究にも頻繁に利用されているのであるから、今さら「謎」というのは奇異な感じがするが、『張州雜志』について説明しようとすると、不明な部分が意外に多いのに驚かされる。たとえば、よく紹介される「東照宮祭」の行列図について、これは編者である内藤東甫の実見に基づくオリジナルなのか、すでにあった祭礼絵巻のようなものの写しなのか、また知多郡の部に載せる「捕鯨図」についてはどうか、春日井郡の「狼」などの動植物図はどのようにして描かれたのか等々。あるいは、未完にして百巻の威容を備え、完成の暁には三、四倍にも達したかと推定される、この雄大にして詳細な尾張の地誌兼絵入り史料叢書は、編者ひとりの探求心の所産なのか、それとも別の目的が課せられていたのか。そもそも、編者の内藤東甫についてさえ、一通りの職歴は知られているものの、『張州雜志』編纂に関する具体的な事実ほとんど確認されていないのが現状である。つまり、利用こそは進んでいるが、『張州雜志』そのものに関する研究、史料批判は遅れているといわざるを得ないのである。

『張州雜志』そのものと書いたのは、『張州雜志』は今ある百巻(冊)がすべてなのか、という疑問(期待)を以前から持っていたからである。周知のように、この本は東甫の没後に赤林信定という人物によって百巻に整えられた。百巻の内容を見ると、一巻が上下に分かれていたり、巻の中途に「張州雜志」の内題が現れたりする。また、申し分のない浄書本の中に、少し訂正の加わった稿本のようなものが交じっている。少し無理をして百巻に整えた様子が窺えるのである。しかしそうだとしても、この百巻だけが遺されたもののすべてではなかったはずである。浄書本には稿本があつたに違いないし、浄書に至らなかった稿本があつても不自然ではない。それらは一体、どうなってしまったのだろうか。

昨年、別の史料調査の際に、ご所蔵者のご厚意で表題も内題もない三冊の本を拝見する機会に恵まれた。訂正や書き込みの多い草稿本ではあったが、その書体や枠の中に絵を描く方法が『張州雜志』によく似ていたので、「もしや」という期待を押さえきれず博物館へのご寄託をお願いしたところ、快くご承諾いただいた。それから間もなく、別のご所蔵者から、この三冊の連れと見られる一冊を、やはり博物館にご寄託いただいた。あわせて、これら四冊が昭和五十年代半ば頃に名古屋の古書肆にまとまって売りに出され、たまたまおふたりの手元に分かれた事情も判明した。奇妙な偶然で、およそ二十年ぶりにこの四冊はまたひとつになったわけである。



稿本 第四冊 柴田氏蔵 (名古屋市博物館受託)

この度の展覧会で、これら四冊の稿本を『張州雜志』とともに紹介することができるのは、これもまたおふたりのご所蔵者のご厚意による。これにより、四冊の稿本は、およそ二百年ぶりに『張州雜志』百巻と再会することになるのではないかと思う。

では、四冊の稿本について、その概略を紹介し、その示唆するところについて考えてみたい。なお、冊次は便宜的なもので、最初の三冊本を第一―三冊、別の一冊を第四冊と呼んでいる。

【第一冊】「一ノ宮祭」を中心に、一宮村の祭礼・神事を描いている。ほとんど下書きと見られる白描であるが、一部朱で着色している。奥書は無いが、「明和七年(一七七〇)寅百姓願に付又々のほり寄附之由」という走り書きが見られ

る。「丹羽家書」の墨印および次の識語がある。
「右内藤閑水翁自筆遺書也」

文政七年（一八二四）甲申孟夏記之
（「玄塘」・「丹羽図書」の朱印）

【第二冊】熱田の神事・祭礼を収める。それぞれ「張州雑志」巻第五十一・五十二に同図があるの
で、その稿本としての性格を持つ。「丹羽家書」
の墨印および次の識語がある。

「内藤閑水翁自筆遺書也」（「玄塘」の朱印）

【第三冊】名古屋城下の「天王祭」と「若宮八幡祭」
を収める。一部に丁寧な彩色が施されるが、メ
モ的な性格の着色である。「明和五子六月改
門前町」と書かれた綴じ込みがある。第一冊と
同じ識語および次の奥書がある（写真参照）。

「明和四年丁亥六月書」（東甫自筆と推定）

【第四冊】犬山及び犬山周辺の祭礼図を収める。中
心は、犬山村の白山宮祭（犬山祭）。第一冊と同
様の墨印と識語がある。

まず、これら四冊が丹羽玄塘（尾張藩川並奉行所
調役）の旧蔵書である点に注意したい。同じ丹羽家
の旧蔵書の中に、『張州雑志』の稿本と目されてき
た『謄志』（六冊、鶴舞中央図書館蔵）がある。今
回の展覧会にも出品されているので比較していただ
きたいが、稿本というには形式的にへだたりが大き
いものの、内容については重複している部分があり
（『謄志』第二冊に載っている挿絵や記事の多くが
『張州雑志』に転載されている等）、『張州雑志』と
の関連は小さくない。稿本というよりは、その前段
階の雑纂と見るのが妥当と思われる。この巻末にも
次のような文政七年の識語（筆者要約）がある。

「この内藤閑水翁の遺書は本屋にあったものだが、
その本屋が最近美濃に移転するに付、尾張の本が余

所に出てしまふのは残念なので買い取って秘蔵する」
類推するところ、先の稿本四冊も同じ事情で丹羽
家の所蔵に帰したものと考えられる。

次に四冊の稿本の成立年代について。第三冊には
明和四年（一七六七）の奥書があり、同五年の書き
込みが見られるから、明和四年に書いたものを徐々
に補訂したと推定される。第一、二冊についてもお
そらく同様で、加筆訂正を含め明和年間頃の仕事と
考えてよいのではないだろうか。第四冊には年紀が
無いが、犬山祭の部分を寛政七年（一七九五）の
『犬山針綱神社祭礼絵巻』（犬山市指定文化財）と
比較すると、行列の様相にかなりの相違が見られ、
古形を伝える史料として貴重である。安永三年（一
七七四）に「乱杭渡り」に替わったといわれる魚屋
町の車山が、まだ「日蓮上人皇下り」のままである
ので、これ以前の成立と推定される。

なお、ちなみに『張州雑志』の中で奥書のある巻
について調べると、安永二年か三年のものがほとん
どで、全部で二十五箇所ある。『藩士名寄』による

と、東甫は明和二年に病氣により退役し、安永元年
に地廻り出勤、同四年に隠居している。「地廻り出
勤」の実態がわからないのが残念だが、『張州雑志』
の一連の作業はこの時期を中心に進められ、少し前
から取材や稿本の準備が始められたのではないだろ
うか。

最後に内容とその価値について。

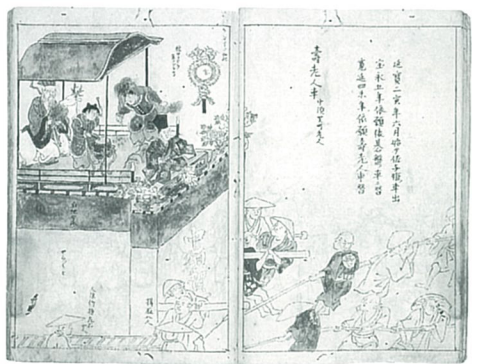
稿本四冊の内、第二冊を除く三冊は新出の内容を
持つ。稿本のままで浄書本に至らなかったと思われ
るので、『張州雑志』の未定稿と言えるが、『張州
雑志』の全貌を示唆する上で貴重な三冊といえる。

さらに、東甫が作業上の書き込みを施した稿本で
あるのは、『張州雑志』の作成過程を検討する上で、
極めて重要な意味を持つ。詳しい検討は別の機会に
譲るが、東甫の作業が、あらかじめ用意した机上の
書写と、実見に基づいての訂正・加筆との二段階に
分かれていたことが判明するという点のみを指摘し、
展覧会場での観察にゆだねたいと思う。

（名古屋博物館学芸員）



稿本 第二冊



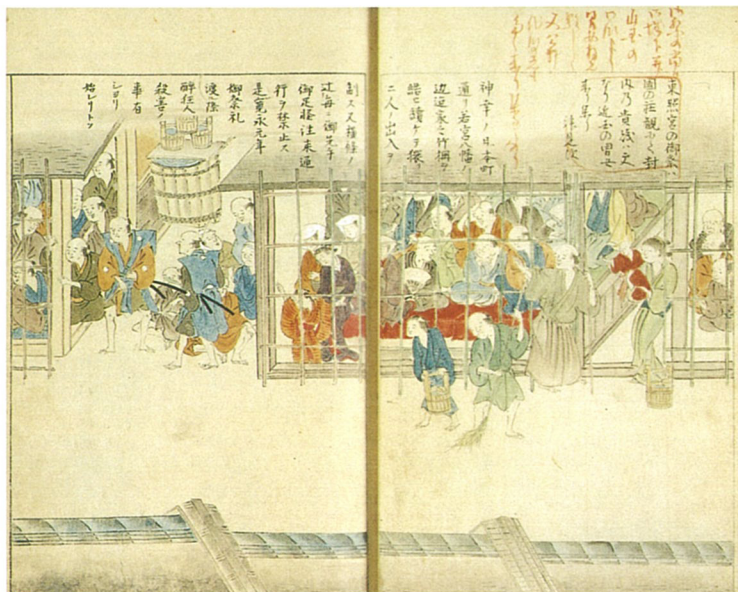
稿本 第三冊



稿本 第三冊奥書

いずれも豊田氏蔵（名古屋博物館受託）

張州雜志



張州雜志 100巻100冊 内藤東甫編
写 (編者自筆 寛政元年赤林信定序)
(29.1×19.1cm)

図は巻20より東照宮御祭礼の行列を待つ見物人

また、『張州雜志』は、料紙に『張州府志』や『尾張志』とほぼ同じ大きめの美濃版の紙を使用している。清書本とはいえない一般の写本にはあまり使用しないものである。『張州雜志』は、最初から藩へ献納するつもりで執筆されたもののようにも思われる。

紺紙に金泥で花鳥風月や紋様を描くと、仮名書きの和歌や物語の書物の表紙となるが、紺や少し薄めの縹色(露草色)の無地表紙は、学術書や記録類の表紙に用いられる。藩が編纂した尾張の地誌『張州府志』や『尾張志』の表紙は縹色である。

今号の「展示室」でもとり上げている『張州雜志』の表紙である。『張州雜志』は、尾張藩士で画家としても知られた内藤東甫(一七二七-一七八八)が著した挿絵入りの尾張国の地誌である。(二・三頁参照) 東甫が急死したため、同じく尾張藩士で、東甫と親交があったと考えられる赤林信定等が、目次をつくり、現在のように百冊にまとめ装幀した。この表紙もこの時に附けられたものと推定される。表紙の紙は、藍で染めた紺紙、太い線と細い線で枠だけ木版刷りされた題簽に「張州雜

志」と巻数が、あたかも刷られたかのように百冊ともに揃った字で墨書されている。藍で染めた紙を用いるのには、藍の虫除けの効果をねらったものでもあるが、光沢のある色合いは、渋や黄蘗の染め紙とは、比べものにならない高級感がある。紺紙の表紙というと、徳川家康が作成させた皇室や公家、寺社所蔵の古記録の写本に、紺の表紙と紫の綴糸を用いたことが知られ、初代藩主義直が収集、作成させた記録類の写本にも紺表紙のものは多い。

名古屋市蓬左文庫

〒461 名古屋市東区徳川町1001
☎(052) 935-2173

◆交通

名古屋駅、栄より
市バス(基幹バス2番)・名鉄バス(「本地ヶ原方面」行)
「新出来」下車、徒歩5分
大曽根より
JR中央線「大曽根」下車、南口より徒歩10分

開館時間	午前9時30分～午後5時
休館日	毎月曜日、第3金曜日 祝日(日曜、月曜のいずれかに重なる場合は、日曜開館、月、火休館) 特別整理期間(2週間) 年末年始(12月28日～1月4日)
閲覧	館内のみ。館外貸し出しはいたしません。
閲覧時間	開架図書 午前9時30分～12時 午後1時～5時 開架図書 午後9時30分～午後5時
展示	保存上支障のないものについて、マイクロフィルム複写などの方法により行います。 電話・郵送による申込みも可。 取扱い時間 午前9時30分～12時 午後1時～5時 30件程度の所蔵資料を随時展示。テーマ、期間、回数は、年度により異なります。

「蓬左」第53号 ☆平成7年10月7日発行 ☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫(東区徳川町1001番地)
☆無料 ☆不定期刊行 ☆印刷：大同印刷株式会社(東区泉2-3-18)